

3代目助手時代

水内俊雄

(元教員 桐大阪市立大学)

少々年齢が遅れて後期博士課程の1年を終えようとする1985年3月6日の昼ごろに、水津一朗先生（京都大学文学部長を務められたあと当時62歳のお年であった）がたまたま院生の研究室にいた僕にはなしがある、ちょっとということで、つながっている助手まで数歩で、教授の前に赴いた。九州に就職のハシナがある、どうか、九州とは九州ですか、そうだ、助手であり3年の任期つきである。

私だけが学生身分での結婚を控えていて、吉田山東麓から北白川の小さなマンションに居を移したばかりであったが、それをはるかにうわまわる遠距離の引っ越しであり、しかも九州方面とは思いもつかない地であった。親戚からは、福岡と博多はどれくらい離れているのか、と訊かれたり、まわりもびっくり。地理学教室内でも何かしら浮いた存在になって居心地のよくない状況があったこともあり、それとはまた別に奈良大学におられた藤岡先生のFHGへの活動に楽しんだりと、少々ねじれた京都生活からこの福岡への転地は、まさしくぼくの生涯に刻まれたドラマチックな移動となつた。

3月14日には下見に行き、早速野澤先生とお会いし、前任の助手の熊谷さんが阪南大に異動の前にインドネシアにおり、こまごました引き継ぎは筆頭院生の堤君から受けることになった。4月1日に赴任し、その後に決まった田島の大学官舎を見に行くために乗り換えた天神の都会的景観と地下街のおしゃれには驚き、こんなすごい都会が九州にあろうなどと夢にも思わなかつたし、これは驚愕であった。また何をしゃべっても開西人ですか、あるいは出張ですか、と聞かれたことにも、異邦の地に来たことを実感し、ある種言葉の違いで日常的に外者と識別されてしまうカルチャーショックも初めて受けた。

その後短期間に、結婚式、藤岡先生の逝去、など人生の節目ともいえる重大なことも経験し慌ただしい毎日を経ながら、教室運営にはそして福岡には、短期間になじんでゆくことができた。野澤先生の教授1名、助手1名とまさしく小部屋であったが、堤君、そして新入の院生の中島君、そして数名の学部生の小世帯も、九州大学文学部の伝統的なせせらぎ、こうした新参考室の歴史のなさを補うに余りあったと言えよう。

野澤先生の研究者肌と気さくな江戸っ子の絶妙なコンビネーションに僕がすっとフィットし、今から思えば本当に古き良き時代の教室運営、財政であり、かつ新興の教室の運営ができる、本当に居心地のよい環境で助手をつとめさせていただくことになる

（写真1）院生机に座り、1987年3月27日の卒業式前に撮影）。官舎に近かった六本松の教養部の小野先生、小林先生ともすぐに挨拶にうかがい、箱崎とは異なる雰囲気を味わうことができた。科研も野澤教授を代表とする総合研究（A）が活動しており、地理思想などというばくにすれば、まったく未知の分野での科研運営にも関わることができた。またまわりは伝統のある教室が並び、いずれも有期雇用の助手が配置され、期限切れ後に全員が研究職についたわけでもなかつたので、助手同士の横のつながりや、事務室とのアフターファイブも含めたつながりは濃厚であった。助手たちは箱崎、ときどき天神、事務室とは別での数々の飲み会となり、なつかしい福岡／博多の夜の街の思い出として刻み込まれている。

比較的予算が潤沢な実験系教室だったので、当時ちょうど発売されたNECのPC9800シリーズをすぐに導入し、いわゆるパソコン時代の先駆けを教室に実現し、その後新たな電算機部屋を獲得できること。同時に堤君と大型計算機センターでSPSSを一生懸命動かしていくことも懐かしい。学部生実習では、報告書を刊行する結構性根のはいった前例があつたので、誰の案発かはすっかり忘れたが、玄海の祖島、小呂島での離島漁村調査を行つた。翌年は糸島方面の姫島という離島漁村が選ばれ、3年目は打って変わって豊後の城下町竹田となつた。たぶんこの写真2は、そのときお世話になった八賀山の後藤先生宅で撮った写真であろう（1987年7月撮影。隣は当時3年生であった森君である）。手作りの報告書を小呂島と姫島では作成し、科研の報告書も後に英語出版物にするなど、いわゆる印刷、編集の術は結構身に付いたし、それ以上に4泊5日くらいの地域調査のチームプレイの要としての助手の役割の重要性、あるいは調査を円滑にかつ充実化させるコツも身につけたかもしれない。日本地理学会の地方大会もさせていただいたことからも、イベント運営のノウハウを知ることができた。焼酎という安いアルコールを知つたことにより、とにかくアフターエイトかナインくらいに、院生学生と箱崎のちょっと場末の飲み屋でよく飲みよく語つたことも懐かしい。「九大前」発の西鉄の遅い終バスには助かつたが。

ぼくの研究上の進展と言う点からは、インナーシティの労働運動と都市の居住分化という形で、京都時代からの延長で当初は論文生産をし、カステルにかぶれて社会的共同消費集団への着目から、都市の人口や財政分析をちょっと手がけたが、何といふ地元の福岡をネタにした研究をしたいと、炭鉱住宅や社宅の形成などに目をつけもした。結局、雇用期限の最終コーナーの3年目の秋から、福岡県史の都市史の担当を日本史の有馬助教授（当時）から仰せつかり、都市史研究を福岡県の8都市を対象に始めた矢先、いく

つか公算を出していた中で、思いもかけない形で、北陸の富山大学に1988年4月より赴任することになった。またここでも新たな出会いがあったわけだが。

新興の研究室であったので、また新たに院生遠城君も進学し、院生には極力学会大会での発表を促し、懇親会ではいろいろ先達を紹介し、九州大学の存在を印象づけ、かつ雑誌論文にも掲載できるように努力してきた。周縁からの切り込み隊としてちょっとした輝きを放つ後方支援をしたのではないかと自負はしている。福岡県史の資料収集にその後数年かかつたために、かなり頻繁に福岡に富山から通っていたため、官舎の同僚やOBやOGとかは頻繁に会い、いまもフィールドのひとつが北九州市にあるために旧交を温めている次第である。

28歳から31歳まで助手として赴任したわけであるが、この年齢、まさに現在では院生や、博士研究員なり立てで、まだ教職についていない世代であり、まさしくそうした面々と毎日いっしょに仕事や調査、研究をしていることを考えると、大学およびそれを取り巻く環境は激変したことを痛感してしまう。古き良き時代のたぶん最後の助手であったのではないかと思うし、富山大では大学改革（教養部廃止）の急先鋒の片棒を担ぎ、その後の異動先の大坂市立大学では大学院部局化やリストラ、選択的強化の流れでタスクフォース的な都市研究プラザを作つたりと、その意味では、流れにあつた世術に身を任せてきたのかな、あるいは流れを作ってきたのかな、と自己分析している。

3代目の助手に赴任してからも25年経過したが、遠いようで近いような、改めて回顧してみて、まだまだ現役だなあ、と実感した次第である。



写真1



写真2